最優秀賞

ホタルの光

土浦日本大学中等教育学校
一年　網　永　莉　々

「去年は放流した三百匹のホタルの幼虫の内、四匹を成虫として確認できました。」
そう嬉しそうに語る「ビオトープを守る会」会長さんの言葉と笑顔は、未だに私の記憶に鮮明に残っている。

一昨年の夏。私は自由研究のテーマを近くのビオトープにする事にした。幼い頃からザリガニ釣りに行き、昆虫やメダカ、沢山の動植物に親しんできた。小学校でも田植えや稲刈りを経験させてもらい、ビオトープについて興味がわいていた。

私の突然の取材を、快く引き受けて下さった「ビオトープを守る会」の会長さんから、ビオトープの大切さに改めて気づかされた。また、今の日本の現状を知ることにもなった。

ビオトープでは無農薬での米の栽培を行っている。田の水はとてもきれいで、田植えの際にはタニシ、蝶、イナゴなど様々な生き物を見ることが出来た。しかし、私は疑問を持った。「なぜ、ビオトープでしか見ることがない生き物がいるのだろう。」その答えは会長さんの話の中にあった。

「他の田んぼは農薬で生き物が住むことの出来ない水が張ってあるんです。」
本来、田の生き物は食物連鎖が出来ている。ところが、人間は米の収穫量を増やすために虫たちを農薬で駆除する。農薬という毒で水田を汚してしまった。生き物は死に絶え、生命の営みの鎖は途切れてしまったのだ。

水の汚染のために地上から姿を消してしまった種がいる。今や佐渡にしかいないトキは、江戸時代、十万羽を超え、日本の空を朱色に染めた。しかしながら、平成七年にはたった一羽が残されるのみとなった。このトキは命がつきるまでケージに入れられていた。狭いケージの中で、トキたちは再び空を飛

び回ることを夢見ていただろう。農薬が多く含まれた水で育った汚染されたドジョウをトキが食べることで、トキの体は段々と蝕まれていく。水質汚染は、乱獲で数の減ったトキたちに追い打ちをかけた。日本のトキは絶滅した。

水質汚染の原因は農薬だけではない。ごみの投棄や、生活排水が水を汚す。逆に言えば私達は取り組み次第で水をきれいにすることが出来るのだ。私にできることは何だろう？捨てられたゴミが目についたら拾う。拾い続ける。ゴミが、川やビオトープの水の中に入ることを少しでも防ぐ。食事をした後の皿を、屑紙等で拭き取ってから洗えば、洗剤が減る。生涯これを続ける。そしてこの小さな行動を他者にも波紋のように広げていく。そうすれば生態系の破壊を止めることが出来るかもしれない。今、一年間に絶滅する動物は四万種と言われている。この四万種を私達は救わなくてはいけない。水を綺麗にする事で、レッドデータブックに載った多くの動物が救われるはずだ。

過去、私達人間はより便利で暮らしやすいことを理想に掲げ発展してきた。しかし、私達の発展により多くの命が地球上から姿を消した。動物たちが死に絶えた地球で、人間だけが生き残れるのだろうか？未来に私達が理想とすべきなのは、一本も雑草の生えない農地ではなく、沢山の生き物がひしめき合う田。科学で生き物を殺すのではなく、科学で生き物と人間が共存する社会なのではないか。

「ビオトープを守る会」の会長さんの笑顔の意味。それは、たった四千四百平方メートルのビオトープの中で、人の手助けにより理想の生態系が作られ、自然に命の循環が構築されたから。豊かな水と、ホタルや他の生き物が暮らしていける環境が整ったからだった。これは、環境がどうしようもなく破壊されてしまった現在でも、私達が努力することで自然の力が蘇るのだと証明してくれているのだと思う。わずか四匹のホタルが、私達に教えてくれた希望。私は希望を守りたい。